赤眼のクリスマス

si-ta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤眼のクリスマス

【Ｎコード】
Ｎ７３２７Ｚ

【作者名】
ｓｉ－ｔａ

【あらすじ】
赤眼（八妖）のクリスマスイヴ。お喋りしたり、ちょっと揉めたり。

（前書き）

メリークリスマス！
ハッピーなお話ではないので悪しからず。

「ねえ、みんな知ってる？　明日はクリスマスっていう祭日なんだってさ」

そう言葉を発したのは八歳程の少年だった。目は細いが、あどけなさの残る可愛らしい顔立ちをしている。

そこには、少年以外にも幾つかの人影があった。たいそう美しい若い女から丸々と肥えた男、小柄な痩せた老人と、その見目形は大きく異なっているが、彼らの瞳は一様に赤かった。

「あら、聞いたことがないわね。何なのよ、彼ノ狐（かのこ）。その『くりすます』っていうのは？」

低い濁声が響く。声の主は丸々と太った男だった。女物の着物を纏っているが、まるで毛布を巻かれた豚のようだ。当然ながら恐ろしく似合っていない。

「元々は偉い人が生まれた祝祭らしいんだけどね、想い人と過ごすための特別な日ってことになってるらしいよ」

「んまあ、素敵！」

淡々とした口調の彼ノ狐に対し、太った男――氷蟆（ひば）は胸の前で両手を合わせ、感嘆の声を漏らす。それを見て、氷蟆の隣にいた人物が堪らないというように吹き出した。

「ちょっと龍華（たちばな）！　何がおかしいのよ！」

「お前みたいな野郎には縁のない祭りだ。一回鏡でも見てこい」

「それは一体どういう意味よ……！」

けたたましく言い返しながらも、氷蟆は悔しそうに袖口を噛み締めた。その様子を、龍華は鼻で笑う。
氷蟆からすれば残念ながら、というべきか、龍華は精悍で凛々しい目鼻立ちをしていた。深紅の髪が逞しさをさらに強調する。加えて若々しく、体型も引き締まっている。氷蟆本人も、自分と彼とで美醜をつければどうなるか程度は分かっているようだ。
龍華は言葉を返す代わりに、やれやれ、というように両手を左右に開いてみせた。

「それよりも、あんたの力を発揮するには最適な祭りなんじゃねえのか――幽姫姐さんよ？」

龍華はにやりと笑みを浮かべ、傍にいた女へ視線を向けた。

「さあ……如何でしょうね。そのような祭祀は、この国にはまだ広まっていないようだから」

幽姫と呼ばれた女は軽く首を傾げ、静かに返した。声が小さいのはいつものことだ。
姫という名に恥じないほどの美貌を幽姫は持っていた。見事なまでに痛みのない長い銀髪。肌はあくまで白く、淡紅色の唇は優しげで、何処か儚げな印象を与える。血のように赤い瞳だけが少々不釣り合いだが、それすらも色香を醸し出していた。大方の男は目を引かれずにはいられないだろう。否、男に限らず女ですら息を呑むほどに、幽姫は美しかった。

「そりゃ残念だ。でも元々あんたが祭りに託(かま)ける必要なんてねえか。いつでも男の方から喰われにくるもんな」

龍華の言葉に、幽姫は目を細めただけで何も言わなかった。
代わりに甲高い濁声を響かせたのは氷蟆だ。謙遜もせず、上品且つ悠然とした様子でいる幽姫に対し業を煮やしたらしい。

「あー、やっぱり幽姫、あんたむかつくわね！　ちょっと綺麗でちやほやされたって、所詮は女じゃないこと、忘れるんじゃないわよ！　あたしたちには男も女もな、い、の、よ！」
「……ま、それは氷蟆も同じだけどね」

彼ノ狐が横から口を挟んだ。氷蟆がぎろりと睨みつけたが、彼ノ狐は涼しい顔をしたまま、氷蟆を見もしない。

「ああ、そういえばね」

急に何かを思い出したように、彼ノ狐は仲間たちの方へ顔を上げた。

「クリスマスの前日の夜中には、子どもに贈り物をする慣わしもあるみたいだよ」
「ほー」
「どう、龍華？　僕も子どもだけど」
「何がどう、だよ？」
「贈り物してみない？」
「断る」
「ちぇ」

彼ノ狐は小さく舌を出し、顔を逸らした。しかし大して残念そうという様子でもない。元々あまり期待などしていないのだろう。
龍華から目を逸らした先で、彼ノ狐は老人と視線がぶつかった。

彼ノ狐より身長は高いが、成人男性の平均からすればかなり小柄であろう痩せた老人だ。頭部の毛はほとんど失われているが、髭は長くふさふさと立派だ。彼ノ狐や幽姫以上に弱々しく見受けられるが、その眼差しにはまだ覇気があった。

「どう、嗣鬼(しき)も？」
「……何の話じゃ」
「子どもに贈り物」
「誰が子どもじゃ。己は見て呉れが幼子ではあるが、単なる化け物じゃろ」
「はあ……もう、つれないこと言わないでよ。僕、この姿結構気に入ってるのにさ」

面白くなさそうに呟きながら、彼ノ狐は自分の体を眺めるような素振りをした。それから同胞たちの姿を順に捉える。人の子ではない以上、人並み外れた見目の良さも何ら特別なことではない。氷蟆に関しては――姿を具現化する際に何らかの失敗したのだろうと言わざるを得ないが。

「そういや、揚羽(あげは)と神楽(かぐら)の姿が見えねえな。あいつらどこ行った？」

そう言って龍華が辺りを見回し、氷蟆もそれに倣う。

「別にいつものことじゃんか。ねえ幽姫？」
「ええ、そうね……」

幽姫がそう呟いたとき、背後の木々の中から微かな物音がした。

「おったのか、揚羽。立ち聞きとは相変わらず性質(たち)が悪い」
「……別に隠れて聞いてたつもりなんてねぇさ」

木立の中から現れたのは一人の男だった。黒い外套を着た細身の男だ。男といっても、その容貌だけでは男女の判別は難しい。黒く細い髪を肩の下まで垂らし、その毛先には編み紐の飾りを付けている。細く切れ長の紅い瞳。鼻筋は真っ直ぐに通っており、薄い唇にはあまり色がない。顔立ちは端正だが、如何にも男性的な顔立ちの龍華とは異なり、女性的で美しいと言えるだろう。

「面白い話を聞かせてもらった。何の祭りかは知らねぇが、俺は祝祭と洒落込ませてもらう」

揚羽の言葉を聞き、幽姫は怪訝そうに眉を寄せ、小さく顎を引いてみせた。その表情は揚羽の真意を尋ねている。

それを察した揚羽は言葉を続けた。

「……決まってるだろう。人間たちの死の祝祭。血祭りさ」

そう言葉を発してから、揚羽は口の端を歪めて笑った。

（後書き）

微妙な終わり方ですが、特に続きはありません。

『そして赤眼は嗤う』と同じ舞台です。

本編にもいずれ登場するかも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7327z/

赤眼のクリスマス

2011年12月24日10時50分発行